

# 少年犯罪を誘発する環境とその対策について

192526 増田純平

- 1 はじめに
- 2 原因として挙げられる環境要因
- 3 環境から誘発する少年犯罪の種類
- 4 少年犯罪を防ぐ環境の整備
- 5 おわりに

## 1 はじめに

少年犯罪の要因には犯罪少年を取り巻く様々な環境にあるとされている。まだ未成熟な心身を持つ少年は、様々な環境による影響を受けやすいものとされ、以前から少年たちを取り巻く劣悪な環境の整備が問題とされてきた。しかし、その環境がどのようなものかを調べていく際、ただ単純に劣悪な環境だけが少年犯罪を誘発しているのではないと感じ始めた。あるケースでは、周りから見たらとても悪い環境の中で生活しているようには見えず、むしろ素晴らしい環境の中で生活していると思われていた少年が、のちに凶悪な殺人事件を起こしていた。このことから、周りも気づかないほどの些細な出来事でも、少年の心身に悪影響を及ぼし、凶悪な少年犯罪に繋がるのではないかと考えた。そこで、少年犯罪に影響する環境を大きなものから、細微なものまで調べ、そこからどのように少年の心身に影響を及ぼし、少年犯罪へのトリガーになるのかを自分なりに証明するべく、探っていこうと考える。

## 2 原因として挙げられる環境要因

今回、このレポートを執筆するにあたって、少年犯罪を誘発する様々環境要因を調べると、大きく分けて3つの要因が挙げられる。それは、親の指導力・愛情表現の低下、経済難による生活、SNSの発達による他者との簡単なコミュニケーションである。

まず、親からの影響については、少年犯罪の最大の要因であるという学説が建てられるほど、大きな要因とされており、非常に重要でもある。帝京大学の星野 周弘教授の研究によると、非行少年の多くは単身家庭が相対的に多いとされている(1)。理由としては片親環境により親子間の交流が乏しく、また、親による子供の育児放棄がされやすいと考えられているからである。さらには子どもに対する虐待行為も非常に悪影響を与え、親からの愛情を十分に受けず、その影響から他者に攻撃的の行為を行うというケースも非常に多いとされている。しかし、こうした育児放棄や虐待など、あからさまに劣悪

(1) [第3部 調査結果の分析：第2章 非行の家庭的要因 \(cao.go.jp\)](http://cao.go.jp)帝京大学文学  
部教授 星野 周弘 閲覧日 2023年 1月 23日

と思われる環境以外でも、少年に悪影響を及ぼす家庭環境も存在する。傍から見たらしっかりとした教育や愛情を受けている家庭でも、凶悪犯罪に繋がるものもある。平成9年に世間を騒がした、神戸連続児童殺傷事件がそれに当たるとされる。この事件の犯人とされる少年Aの家庭は、傍から見るとごく普通の家庭であり、こうした凶悪事件に繋がるとは思えないと近所に住む人々は言っていた。だが、少年Aの著書である「絶歌」によると、厳しいしつけや、教育などが行われていたとされ、それにより心身が圧迫され、今回の事件へと進んでいったとされていた。このように、両親の厳しいしつけや過干渉が子どもを追い詰め、凶悪な事件へと繋がるといったケースも多くあり、これも少年犯罪を誘発する家庭環境の大きな要因の一つとなっている。

次に、家庭の経済難から生活困難を極め、犯罪に走る場合である。貧困からなる犯罪は刑法においても多くあるが、少年法においても同じことが言える。家庭の経済環境から満足な教育や生活が受けられず、それにより少年の将来が制限されてしまうと考えられる。佛教大学の社会学論文によると、アンケート調査の結果、少年院入院者の過半数が就学ではなく、「正規の仕事」や「アルバイト」または「何もしていない」という状況であった。(2) 現在、わが国では中卒、高卒から働く少年たちが多くいるが、大卒と比べて就職先にもよるが、一般的に給料やキャリアへの見通しが狭いとされている。このことから中卒、高卒の少年達は先の見えない不安から非行に走るのではないかと伺える。

最後に SNS の普及による少年の非行である。近年、IT 技術の進歩に伴い、小学生からスマートフォンを持つなど、子どもとインターネットは切っても切れない関係になってきている。それに伴い、SNS を利用した非行行為も増加している。また、SNS を利用した犯罪に限っては、少年が加害行為を行うというよりかは、被害を受けるケースが多い。近年では、神奈川県で起こった座間9人殺害事件がこのケースに当たり、9人の内、4人が未成年であった。このことから、SNS 利用は生活を豊かにする一方で、未成年が凄惨な事件に巻き込まれる可能性も高まった。

(2) 【作田 誠一郎】「非行の要因からみる少年非行の現状と規範意識」佛教大学社会学部論文集 第73号(2021年9月)19頁

### 3 環境から誘発する少年犯罪の種類

次に、以上に挙げた環境から、どのような犯罪行為が生まれるかについて述べていきたい。

まず、親への影響からなる犯罪行為である。まず、家庭環境において、親からの暴力

行為を受けて育った非行少年の多くは、恐喝、暴行など、他者に身体的なダメージを与える犯罪が多いとされている。このことから、自身が両親という自身よりも強い存在から日常的に暴力を受け続けることにより、自分より弱い人物や動物に暴力行為を行うことで自信が抱えたストレスの発散のはけ口になっていることがうかがえる。また、両親からしっかりと愛情を受けず、よって他者への愛情の伝え方を知らないまま成長したため、暴力行為という、簡単な方法で他者を知ろうという心理構成が原因ともいわれている。これとは逆に、親からの過度な干渉、あるいは愛情により、子ども自身の欲求や感情などを押し付けるケースでは、神戸連続児童殺傷事件などのように、凶悪犯罪に繋がりやすい傾向にあるとされる。更なる例として秋葉原通り魔事件が挙げられる。これは2008年に、東京都秋葉原で犯人が2トントラックで赤信号を無視して交差点に突入し、通行人5人をはねた上、降車後、通行人や警察官ら17人を次々と刺し、7人が死亡、10人が重軽傷を負った事件である。事件当時、犯人は25歳であり、未成年には該当しないが、幼少期の頃から母親への過度な干渉を受けていたとされている。母親はいい大学に進学させようと、抑圧的な教育方針で犯人を育てていた。これにより暴力的傾向が強くなり、このような事件に至ったとされる。このように親からの過度な干渉による少年の非行行為は、長年の積み重ねを経て、成人後に爆発し、このような凶悪犯罪を起こすケースも多くある。2018年に発生した医学部9浪女子母親バラバラ殺人事件もこれに該当する。

次に、家庭の経済難からなる犯罪行為である。このケースにおいても、暴力行為等の非行行為が多い。しかしこのケースに至っては強盗犯罪も多いとされている。(3) 家庭の経済的な問題から中卒、高卒の若者たちに対しての就業における整備が十分に取られておらず、それにより安定した給料がもらえない、もしくは低すぎるといった状況が発生してしまうと考える。このような状況を脱することができない中で、生きるためには、金や金目のものを盗まなければならないといった考えに至るのではないかと考える。

最後に近年のSNS環境における犯罪の種類である。SNS機能を利用することで簡単に人間関係が広がり、本人たちが無自覚なままネット上の不適切な有害情報を共有し、いじめ、性被害、薬物などの問題行動に発展していくケースが多い。また先ほども述べたようにSNS環境における場合、少年達が加害者となる場合と同等に、被害者になることも多い。SNSにより見知らぬ人と簡単に繋がれることから、顔も知らない大人と会い、事件に巻き込まれるケースが後を絶たない。この場合、性犯罪が多く、被害者も女性が多くを占めている。また、場合によっては座間9人殺害事件のように、凄惨な事件に繋がることもあり、近年こうしたケースが増加している。日頃の抱え込んでいる人に簡単に言えない悩みでも、匿名ということで気楽にSNSに吐き出すことができるため、それに付け込んで犯罪に利用されているのである。

(3) [平成15年版 犯罪白書 第5編/第3章/第2節/5 \(moj.go.jp\)](https://www.moj.go.jp) 閲覧日 2023年1月23日

## 4 少年犯罪を防ぐ環境の整備

では、以上の少年犯罪から少年達を守るにはどういった環境の整備が必要なのであろうか。私は全てのケースにおいて、家庭環境の整備が非常に重要であると考えている。

まず、親養育者の子どもへの態度が非常に重要であると考えている。暴力を振るえば暴力への親和性が高くなり、過度に厳しい、溺愛だと自分がいきれなかった不満が爆発しやすい、社会のルールが守れなくなるとなるなど、こうした影響を及ぼしやすい。帝京大学の星野教授によると、少年犯罪の多くは過去に親からの暴力を受けた者が大半を占めるとして、暴力による教育等は絶対にするべきではないとした。(4) また、過度の干渉や愛情は、いつかひずみが生じ、大きな犯罪に繋がるため、適度な関係性でいることが重要とも言っている。また、SNS利用の制限や、子どもの悩みをSNSではなく、親に打ち明けられるような関係性でいることで、SNSによる非行行為、または犯罪に巻き込まれることにも対応できると考える。このように、親との心の繋がりが希薄にならないよう、愛情をもって子どものしつけを行う一方で、子供の個性を尊重し、親以外との関係性も積極的に持たせることによって、共感性や思いやりが育まれていくのではないかと考える。その為にも家庭の教育整備をしっかりとしていくことが親の教育による犯罪を防ぐのではないかと考える。

また、家庭における貧困の改善も非常に重要な要素であると考えている。貧困によって子どもに十分な教育を受けさせることができず、未来が限定されてしまうことを防ぐため、貧困家庭をサポートする福利厚生の実施といった取り組みが必要であると考えている。また、中卒、高卒者への就職口の拡大も必要なのではないかと考える。経済難の家庭をすべて賄える福利厚生が整備できるかと言われると、そうとは言えないのが現代の日本社会である。よって中卒、高卒者の働き口の拡大や、給料の向上などの整備に取り組めれば、中卒、高卒者の少年達の現状解決に繋がるのではないかと考える。

(4) [第3部 調査結果の分析：第2章 非行の家庭的要因 \(cao.go.jp\)](#) 帝京大学  
文学部教授 星野 周弘 閲覧日 2023年 1月 23日

## 5 おわりに

私はこの問題に取り組む前は、少年犯罪は周りの環境からではなく、生まれつきの考えによるものであると考えた。実際、家庭環境がどんなに悪くても犯罪を起こさず、立派に生活している人もいる。しかし、この問題に取り組むことで、環境における影響は、心身共に未熟な少年達にとつともなく大きいものであると学び、またこうした大きなものから細微なものまで、大小関係なく少年の心身に影響を与え、犯罪へのトリガーになると知り、驚いた。現代の社会では多様化が進んだことや、SNSが普及などにより、より複雑な環境になっている。こうした中で少年達と適切な関係、教育を施すことが今後

の少年犯罪の減少に繋がるのではないかと考える。